

講演「災害が起こったら、災害が起こる前に～地域防災力の向上に向けて」

講師；菅 磨志保 大阪大学コミュニケーションデザインセンター 特任講師

「災害が起こったら、災害が起きる前に～地域防災力の向上を目指して」をテーマに、活動事例の紹介を交えた講演が行われました。

講演内容は、①阪神・淡路大震災の経験と教訓から～今、災害が起こったら？ ②地域防災力の向上に向けて～今までと少し視点をかえて ③これからの地域防災活動に向けて～災害が起こる前に、今、何ができる？ の3点でした。以下にその概要を紹介します。

1. 阪神・淡路大震災の経験と教訓から～今、災害が起こったら？

人と防災未来センターの1.17シアターで放映されている阪神・淡路大震災直後の様子の一部が映像紹介され、この災害から様々な教訓が防災対策に反映されていったことが説明されました。とくに、大規模災害時には行政機関も被災し活動が制限されること、他方、被災地の外から大勢のボランティアが駆けつけて活動すること（1年間で137万人超；兵庫県調べ）などが紹介され、それまで公助と自助を中心としていた防災体制の限界を踏まえて、改めて「共助」という形で、コミュニティの中での助け合いや災害ボランティア等、外部からの支援を生かした体制が必要であることが説明されました。そしてこれらを踏まえて、自助、公助、共助の連携に基づく防災対策が進められてきたことが説明されました。

とくに、「共助」の活動として、震災から現在までの間に、災害ボランティア活動と、その活動を支える仕組みが出来てきたことが紹介されました。具体例として、まず、震災の現場で生まれた、被災者のニーズとボランティアを繋ぐ「災害ボランティアセンター」という仕組みが、その後の災害でも活用されてきたことや、災害に備えた緩やかなつながり＝災害ボランティアネットワークが、大規模地震の危険性が高まっている地域（主に都道府県など広域の行政区）や、全国レベルで生まれていること等が紹介されました。

続いて具体的な活動事例として、宮城県北部地震の際の災害ボランティアセンターの活動を取り上げ、災害ボランティア活動を受け入れにおいて、地元の人の役割が重要であること（被災者が支援要請を出しやすい等）などが強調されました。

2. 地域防災力の向上に向けて～今までと少し視点をかえて

次いで、災害は直後のみでなく、それに続く長い復旧・復興があること、復旧・復興対策は次の災害への備えにつながっていることが説明されました。

発生直後の応急対応と復旧・復興期の対応、平常時（災害発生前）の対応として被害抑止と被害軽減、これら4つの局面で、適切な対応を行うことが、相乗的に地域防災力の向上につながる——この考え方を減災サイクルと捉え、このサイクルのそれぞれ4つの局面において、「共助」としてどのような役割が果せるかを考えておくこと、具体的には、発災直後の対応策だけでなく、日常の地域活動の中で取り組める、（減災につながる）新たな活動のメニュー作りを行っていくことの重要性が説明されました。

3. これからの地域防災活動に向けて～災害が起こる前に、今、何ができる？

阪神・淡路大震災の経験、そこから生まれた地域防災活動を進めていく上で重要な視点を生かし、災害が起きる前にどのようなことを考え、備えておくべきか、具体的には、自分の地域で災害が起こった時、自分や地域はどう被災するのかを考えておくことの重要性が指摘されました（ここで参考資料として配布された、自分が被災したときのシナリオを作成する机上訓練のマニュアルが紹介されました）。

続いて、東京の下町で見事な戦災復興を成し遂げてきた地域による安全・安心な暮らしのための環境条件づくりに関する活動事例と、阪神・淡路大震災で地区の 8 割を消失しながらも復興に取り組んできた地域の事例が紹介され、地域への愛着・関心が自ずと地域を守る活動につながっていくことや、普段の生活や地域活動の中で防災力の向上に繋がる活動を考えることの重要性が指摘されました。